

健和会・友の会「健康のひろば」寄稿

「放射線と子供たら 内部被曝について」 大場敬明

「内部被曝による子どもの健康障害」

3月11日の東電福島原発事故は、人類史上かつてない規模の放射線汚染をもたらしています。今なお危機含みの不安定な状態は收拾できず、未曾有な放射線汚染物の地中・水中への流出が続いています。

今、私たちに最も求められているのは、放射線被曝とくに内部被曝を常に意識した、予防と対策をとることで、長期的には原発被曝者の健康診断も行っていく必要があると思われます。

放射線被曝は、外部被曝と内部被曝に分けられます。外部被曝は、医療用X線検査が身近な例で、広島・長崎の原爆炸裂（ピカ）が悲惨な最悪被曝です。全身をガンマ線と中性子線が貫きました。

内部被曝は、吸いこんだり飲みこんだりして体内に取り込まれたさまざまな放射性物質の極微小粒子から、長期間にわたって繰り返し照射されるアルファ線とベータ線による被曝をいいます。これは細胞レベルでの至近距離からの被曝で、微量でも危険であるとされ、原爆症認定裁判の最大の争点（入市被曝者などの認定）でした。イラクの劣化ウラン弾被害も、内部被曝によるものと考えられています。

とくに放射線の影響を受けやすい胎児と子どもに発症してくる恐れのある先天障害や10年後、20年後の晩発障害（悪性腫瘍、免疫異常など）に注意が必要です。内部被曝は限りなくゼロが望ましいので、子供たちの被曝を少なくとも年間1mSv以下（外部+内部）に減らすキャンペーンが、福島はもとより、茨城、関東各県で取り組まれています。関東で最も高い線量の、柏・流山・松戸・三郷・足立で、子供たちを放射線から守る運動の取り組みは、次世代への我々の歴史的責務ではないでしょうか。